

アメリカ研究旅行日記 (1991年 8 月)

A Diary of a Research Trip in the United States, August 1991.

竹 森 一 正*

Kazumasa TAKEMORI

私は1991年 8 月 6 日 (火) から同19日 (月) の14日間、第75回アメリカ会計学会年次大会の参加、カリフォルニア大学図書館調査およびアメリカ議会図書館調査のため、西海岸から東海岸にかけて旅行した。所要費用は、航空券旅行社 (JST) 支払分¥227,200、ホテル代¥100,500、陸上交通費¥30,300、食費¥23,600、その他¥13,000、合計¥394,600であった。(在アメリカ分は1\$ = ¥138.00で邦貨換算した。) 大手旅行社の企画旅行や添乗員付の団体旅行なら、起こりえない事を多々経験したので、反省と今後の注意すべき事柄の整理を兼ねて、当稿を記す。

1. サンフランシスコ到着まで (8 月 6 日)

日本時間 8 月 6 日12:20、横浜駅横須賀線ホーム下の成田エクスプレス待合室にて当学部の白木俊彦助教授と落ち合う。12:33の成田空港行き普通列車で成田空港へ。成田空港駅着14時38分。指定された南ウィングのAmerican Airlines GroupのSTデスクへ行き、航空券受け取りと荷物預かりの手続きを済ます。隣では、ガテマラの少年野球チームを本国へ引率する日本側のコンパニオンのお姉さんが他のメンバーが到着しないので不安気にキョロキョロしている。16時

出国手続き、出国ロビーでブラブラした後ゲートへ。コンピュータ調整のため、1時間遅れで18:15離陸、機体がマグドネルダグラスのMD-11のため、第3エンジンが尾翼付根にあり、私達の求めたのが安い切符のためにかかなりの後部座席であるため、エンジンの騒音が非常に大きい。

前の方の高い切符の客には良い飛行機であろうが、私達には一晩中エンジンモニターを強制されるつらい席である。白木助教授と雑談を途中で止め、目をつむって体力消耗を防ぐ。コンピュータ制御のエンジンらしく、頻繁にエンジン音が変化する。日本時間 8 月 7 日 3:40、アメリカ西海岸時間 8 月 6 日11:40、サンホゼ (San Jose) 空港着陸。入国審査は意外と厳しく、私の前の人達はかなり時間をかけられている。税関では、男性係官は腰に拳銃を下げている。税関では、男性係官は腰に拳銃を下げている。税関では、男性係官は腰に拳銃を下げている。この空港は国際線到着だけが別に設けられている珍しい設計であり、空港のシャトルバスでいったん国内線ロビーへ移動した後、各方面へ移動させる方法をとっている。私達も国内線ロビーへ移動した後、10日の早立用のホテル予約をする。ただし、電話の向こうのホテルの交換嬢とまったく話が通じない。ロビーにいた日本人職員 (イノウエさん) に依頼、ついでに帰国までの全便の予約確認をしてもらう。サンフランシスコ市内へは路線バスはなく

* 経営情報学科-会計

Department of Business Administration and Information Science-Accounting

エアポート・シャトル (マイクロバス型の乗合タクシー) しかないとのこと、電話予約をする。電話ではジェフという運転手が来ることになっていたのに、実際はジョンという運転手が来る。おかしいなと思ったが市内に入った頃から、グルグルと同じ所を回り始め、フィシャーマンズ (FM)・ウォーフのラマダ・ホテルに着いたと思ったら、\$69の請求である。完全に雲助にひっかかってしまった。

実は、サンホゼ〜サンフランシスコ間には、Caltrainという鉄道があり、空港の東北約4kmの駅からサンフランシスコ市内まで行けることが後で分かった。FMウォーフにて潜水艦見学後、夕食。

2. カリフォルニア大学バークレイ校 (UCB) 図書館 (8月7日〜9日)

8月7日起床後、FMウォーフのマクドナルドで朝食。白木助教授とケーブルカー駅へ。切符の自動販売機で白木助教授は\$6の一日券を購入、私は\$2の片道券を購入。9:30なのに乗客はチラホラ、ダウンタウン方面からの電車は既に満員で到着している。観光地である。終点Powellで下車、BART駅を探すが見つかる。BARTは、サンフランシスコ湾地方高速鉄道 (Bay Area Rapid Transit) の略である。切符は自動販売機のみ販売であり、地図で目的地までの料金を確認した上で、①料金を入れる、②切符出のボタンを押す、の手順で切符を入手する。この切符は紙に3ミリ幅の磁気の帯を塗ったもので、磁気部に投入した金額が記憶されている、料金金券という形式である (同形式の第3図参照)。バークレイまでは\$1.80であるが\$4を投入すればバークレイ駅では、その切符に残高「2.20」が印字され戻ってくるので帰りに同じ切符を使える。使用期限はないようである。駅の入出と精算はすべて自動改札であり、更にバス利用者は乗換券発行機で乗換券を得る。

約30分でバークレイ駅着、駅エスカレータを出て交差点の斜め左に構内循環バス発車場があ

る。\$25で乗車、Libraryと運転手に告げておけば、中央図書館下で止めてくれる。UCバークレイ校構内の図書館は、中央図書館 (Main library) の他に21の専門図書館 (Branch libraries) がある。下車した所から右上に坂を上り、突き当たりの大きなビル (Bancroft Library) が中央図書館、2階に検索カードと機械検索の大きなホールがある。会計学は検索カードの箱3個に納められている。機械検索は、UC蔵書の検索を主目的としており、バークレイ校構内を対象としたGLADISというシステムを端末で呼び出し検索をする。入館が自由で機械検索も自由にできるのは嬉しい。Life-cycle costで検索すると26項目が出た。その中には、これまでLife-cycle cost関係の論文の参考文献欄の中でどのようにして見つけたのだろうかという文献があり、首をひねっていたのだが、殆ど全部が収録されている。大きなショックを受ける。もう学会どころではないという感じになった。その他、net present value、capital cost、capital budgeting、S. Branch Walkerを検索。life cycle cost関連については、会計関係14冊分のディスプレイに表示された情報を書き移す。優先順位を付けて高いものから閲覧することにするが、経営と環境設計と記されている分類のため中央図書館では閲覧できず、明日とする。21時まで開館しているが、17時過ぎて蚊が出てきたので気味が悪くなり退館、帰途は駅まで歩いて帰る、約20分。

Powell駅でケーブルカーの切符を買おうと自動販売機の前でグズグズしていたらダフ屋が来て買ってくれという、これも記念と買う。駅周辺は、Union Squareを中心とする有数の繁華街のため日本人が散見されるが、ケーブルカーには乗らない。ダウンタウンの高いホテルに泊まっているのだろう。Powell/Hyde線を確認し乗車。中華街近辺で満員、イタリア人旅行者が多数乗り込み、幼稚園の遠足のようにぎやかとなる。途中でケーブルカーの故障で停車、良くしたもので黄色い後押し用のトラックが来て押し上げる。下り勾配の部分で分離。ホテル

に戻り白木助教授の本屋巡りの話を聞いた後、Hyde駅近くの\$10.95ステーキという店へ夕食に。白人の観光客らしいグループのみ、彼らは良く大量に食べるものとあきれる。メニュー外にパンとサラダが付くが私はもうこれで腹一杯になってしまう、メインのステーキは根性で食べる。

ホテルにて白木助教授と明日の相談をする。寝つけないので、持参したヘッドフォンステレオで小林旭の演歌集を聞く。演歌のメロディは神経をほぐしてくれて、すぐ寝付く。

8月8日、8時に起床して出発。白木助教授はゆっくり寝ていたいとのこと。彼は、今日は市内のCivic center周辺で資料調べとのことなので、私だけで出発、ケーブルカーでPowell駅へ。BART乗車前に朝食と思い、一番客が多いKing's Burgerに入り朝メニューとアイ스티ーを注文する。BARTでUCBへ向かう。本日は経営関係の専門図書館であるStephens館へまっすぐ行く。昨日の優先順位に従って新刊単行書を閲覧する。この館は全館が開架式であり、新着分は未整理棚に置かれている。私が探していた本、W. S. Fabrycky and B. S. Blanchard, *Life-Cycle Cost and Economic Analysis*, Prentice-Hall, 1991. は開架の2階の相当個所がないので司書に相談すると、新着書なのでその棚を探せとのこと、棚10個目程で発見、閲覧室で閲覧。閲覧室といっても、3階の閲覧専用室と1階の雑誌コーナー兼用があり、今回は後者の方の利用である。回りを見渡すと、白人と

東洋人が10ずつ位でほぼ半分、日本人は私一人。コピー機の利用は自由のようなので壁の説明を読む。コピーカード(第1図)を利用し、最初は\$1で80分の利用可、次回から\$1で\$1.05分の金額が記憶される。一枚\$10であり、コピー機2台の内、どちらかの利用者が10枚コピーすれば番が回ってくる仕組みであり、参考になる方法である。研究開発管理の雑誌が2部配架されているので、飛行機の中の読み物用に主要論文をコピーする。雑誌名は、

1. Research and Development Management

2. Research Policy Management

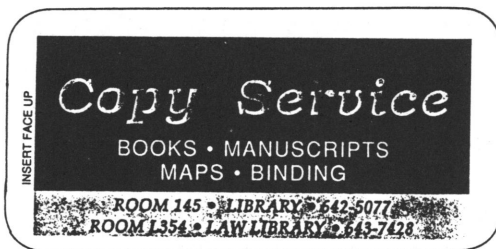
である。帰国後に発注することとする。雑誌コーナー(Circulation corner)には、考えられる会計経営関係の雑誌類は全部網羅されているようである。研究環境は非常に良いようである。ただし、夕方の蚊は本館よりも早くかつ多いので、ねばれない。Stephens Hallの開館時間は次のとおりとされている。

月～木 9:00～21:00

金 7:00～17:00

土 日 13:00～17:00

帰りは、中央図書館で雑誌Lifeの1959年8月31日号を探す。この号は複利計算の重要性を示すインディアンのマンハッタン島の売却の記事が載っているため、管理会計論の講義担当者には絶対追査せねばならない雑誌の一つであるが、日本国内ではどのように調べてもその記事を発見できなかった。いわば私にとって幻の記事であった。司書に言われたとおりに探すが見つからない。再び司書に相談すると、端末を叩き、本館にはないことを確認し、分厚い雑誌蔵書案内をめくり、パークレイ公共図書館(The Berkeley Public Library)行くように指示し、地図を書いてくれた。このLifeの記事の発見は当研究旅行の目的の一つであったので、是非とも今日中に巡りあおうと、17:00のまだ炎天下の構内を出て、何人もの人々に尋ねながらやっと見つける。分かれば単純だが、初めての訪問は大変である。UCB側から見て、BART駅の左にスーパーのJ. C. Penny、その左に1階が商店で2



第1図 UCB図書館共通コピーカード
(上部青、下部黄のプラスチック製)

階以上が事務所のビル、その左がバークレイ公共図書館の中央図書館 (Central Library) である。西側 (BART 駅側) に入口があり、雑誌新聞は新旧共に地下階である。UCB の洗練された館内と較べて雰囲気は全然違う、まるで映画 Startrec に出てくる悪玉の宇宙戦艦の内部のような感じである。しかし、司書は親切であり、5 分程で問題の雑誌 Life を持って来てくれた。預かり証として、図書館カードか会社の身分証明書を出せという、パスポートを預ける。問題の S. Branch Walker 稿の記事はすぐ見つかる、さすが本場である。嬉しさがこみあげて来る。この記事を探して今まで何件の図書館を回ったことか。前に『…字報』という中国語新聞をもった老人が座る。「や、失礼」と机を片付けると、「いいよいいよ」というような調子で手を振る。貸出カウンターにコピーを尋ねると、一枚 10 とのこと。黒人の少年が出てきてコピーをしてくれる。ついにやった、と大切にコピーを仕舞い、BART 駅に向かう。暑いので道路上のホットドッグ屋でジュースを飲もうとしたが、カンのコーラしかないとのこと、諦める。

帰りの BART で私の後ろに座った高校生らしい女性が二人でキャッキッとじゃれあっている。聞くととはなしに聞いていたら、友人に欲婆さんと言われたと言って大笑いしているのである。

この会話の「欲婆さん」という部分だけが日本語である。日本語は汚い言葉も含めて静かに浸透しているようである。他にも UCB の学生が断片的に日本語を使っているのをよく聞いた。

20 時頃、ホテルに戻るが白木助教授は戻っていない。一人で F M ウォーフの中国料理店へ入る。白人半分、中国人半分の客の入りであるが、盛況。料理 3 品、オレンジ・ジュース、青島ビールを注文、昨日のステーキ屋よりもやや安くあがる。外気は寒く、早々にホテルへ戻る。白木助教授も戻っている。今日の成果を互いに話しあう。多いに成果があがった由、同慶の至りである。

明日は白木助教授は UCB には行かず、更に

Civic Center 周辺での資料調べに当たりたいとのこと。別行動となるので、落ち合いは、サンフランシスコ国際空港の出国ゲート左のコーヒーショップまたは United Airlines の国際線の日本行きカウンターで 15:30、1 時間待って来ない場合は単独で Red Lion Hotel に投宿、更に、当日の 21:00 までに電話がない場合は日本総領事館へ電話する、を打ち合わせる。互いの容貌と服装を確認しあい、明日の無事の落ち合いを期す。

8 月 9 日、見事に寝坊、9:44、それでも私が起こさなかったら白木助教授はまだ寝ている。すぐチェックアウトして UCB へ、今回は荷物があるのでケーブルカーには乗せてくれないだろうと、トロリーバスに乗ることにする。架線沿いにバス停を探す。80、中華街近辺から混む。ケーブルカーの Embarcadero 駅の近くで運転手が「BART Transfer!」と叫ぶので下車、ケーブルカーの方向回転台の近くで黒人のジャズが響く。音が実に良い。きれいではないが、心に彼らの楽しさがそのまま入ってくるような音である。アメリカ文化のもう一つの底の広さを感じる。

BART で UCB へ。腹よりも時間が惜しいので、駅前の交差点でスタンドを出しているイタリア人のジュース売りからストロベリージュースの Small サイズを \$2.00 出して飲む。Stephens Hall で昨日の続きをし、一段落したところで、本部棟の前にある生協のハンバーガー屋でハンバーガーとコーラを買う。食事後、環境設計の専門図書館である Wurster 館を目指す。本部棟と学生ホールの周辺を探すが、あまりにも構内が大きくさっぱり分からない。遂に、近くの建物の位置関係から Wurster 館の位置を掴み歩き始める。各建物の大きさが予想以上であり、一つ一つが大きく、地図を参照しながら歩いていると、殆ど進んでいないことが分かる。バークレイ駅までの時間と白木助教授との待ち合わせ時間とを計算しながら歩くが、やっと Wurster 館の手前の Kroeber 館まで来たところで引き返

す時間になってしまった。涙を飲んで引き返す。この広い構内を短時間で2館回るのは不可能であることを思い知らされる。中央図書館125号室の廃棄本販売所は、月～木の11:00～14:00の開館であり、これも今回行けなかった所である。

Sather館の大時計台を背に写真を取りつつ、近い将来の来学を心に誓った。ここで資料集めをすれば、研究は非常に進展することが明らかになったからである。

SF国際空港へ行くために、ガイドブック通りにEmbarcadero駅で下車、金額をキチンと収めたために切符が回収されてしまい、しまったと思う。エレベータで外へ出る途中、「小さな女の子が行方不明、コバルトの眼、アイボリーの髪、電話……番へ」との放送があった。アメリカでよくある小児誘拐がここでも起きたと思う。Hyatt HotelでSF空港行きのシャトルを待つ。寄せてきたシャトルの運転手が\$8とのこと。ボディに何も書いてないから白タクのようである。待っていた一人が「さっき出たシャトルは\$7だよ」というと、その運転手、「この車は他のホテルには寄らずSFO直行です。」と言う。皆、しぶしぶと乗り込む。SF空港で他の白人の客がどのように料金を渡すかを見た。殆どが\$8しか払ってないようである。

SF空港は広い、さすがである。白木助教授の持っていたガイドブックのSF空港見取り図と全然違っている。キョロキョロして歩いていると拳銃を下げた警備員が寄って来た、良く見ているものである。約束のコーヒーショップの近くで白木助教授に会う。一休みの後、サンホゼ行きのシャトルを探す。各方面別にシャトルを案内している誘導員に相談、「ここで待つ」と言う所で待つ。1時間程待ったところでサンホゼ行きが来る。運転手はウェインという、来年から鹿児島で英語の先生をするらしい。Red Lion Hotelで一人\$21を請求、あれれ二人で合計\$26ではないのかなと思ったが払う。その替わりチップ無し。これなら、初日の雲助はそう高いとは言えない。

Red Lion Hotelは実に素晴らしいホテルであ

る。室は広い、調度品は豪華、プールはきれい、コーヒーショップは安くて量が大盛り、従業員が丁寧、値段が安い(\$99+税)、トランジット・ホテルにはもったいないと思う。

3. アメリカ会計学会第75回大会(8月11日～14日)

8月10日5:30起床、6:00チェックアウト、すぐにシャトルでSJ空港へ。このシャトルの運転手も感じがいい。ここの他に、デンバー、シカゴ等にも同系のホテルがあるという。機会があればぜひ利用したいものである。予約用の本部住所をメモする。Red Lion Hotels and Inns, P.O. Box 1027, Vancouver WA98666-9981.

SJ空港は4日前の入国の空港である。とりあえず無事の安堵感からか懐かしい。チェックインの後、搭乗時間を待つ。AA122便は定刻通り8:15に離陸、直ちに朝食が出る。これがまたもボリュームたっぷりである。西部時間11:35(中部時間13:35)にテキサス・ダラス空港着、時計を2時間進める。この時差のためカンが狂ってしまう。到着と同じゲートからのナッシュビル行きのAA1406便は予定どおりに飛び立ってしまった。放送も掛け声もなく、何となく人が少なくなったなあと思ったら出た後だった。慌てて次の便を確保、17:30発とのこと、それは良いのだが、ここは32番ゲートで次の便は7番ゲートなのである。エンエンと歩くこと約30分、やっと7番ゲートに着く。二人共動かずジッと搭乗を待つ。AAA会員らしい中年のアジア人男性がやってくる。待つ人はまばらだったが、実際に搭乗してみると私達は後から6人目だったことが分かりゾットする。

ナッシュビル空港からの直通のホテル電話では、私も白木助教授も予約客には入っていないという。また、予約してない客をシャトルには乗せられないともいう。焦ってしまった。しかし、予約のハガキはナッシュビル商工会議所とホテルとから来ているのだから間違いのはずはない。また、First night depositを取られているのだからと、乗り込むことにした。運良く通

り掛かったラマダ・オプリランドのシャトルに乗り込んでしまう。フロントで、送ってもらった予約承りハガキを提示すると、チャンと予約はできている。変な話である。室は3305という空調機械室の真上の室、文句を言って取り換えをと思ったが白木助教授は別に問題ないというので、このまま3泊することにする。私は寝る前にAAA会場となるオプリランド・ホテルまで徒歩で実測に出掛ける。先程のシャトルの中で誰かが言っていた5分でいけるなどともない、フロントまで20分、更に初日のゴタゴタを勘案すると30分を見込まねばならない。明日は7:00起床、7:30出、朝食の後に8:30現地到着の予定とした。

8月11日、予定通り起床、7:40に室を出る。周囲の朝食を出しているレストランの中で一番人が入っていく所へ入る。しかし、長い行列が店内にできており、動かない。おまけに、白人の老人夫婦が何組も私達をジッとにらんでいる。気持ち悪いのでマクドナルドへ移動する。

オプリランド・ホテルでは、CPE (AAA会員向継続専門教育) プログラムの出席者登録が始まっている。私はAshwoodの間での「人工知能/専門家システムの会計学/監査論/租税論教科への取組、およびそれらの会計実務への取組」に第1志望通りで、白木助教授も「国際会計に関する演習」に第1志望で受講できることとなった。受付所で檜田信男教授 (中央大学) とお嬢さんに会う。日本学術会議からの派遣で『会計』へのAAA大会記を書く係をされているとのことで名刺を望まれる。Ashwoodの間では、私を含めて21名の参加者、定刻9:00を少し過ぎて開会。スケジュールは次のとおりに行われた。

Daniel E. O'Leary, "Introductions and Timing," and "AI: Introduction and Terms," 9:00~11:15

Carol E. Brown, "Firm's Applications," 11:15~12:00

Edward J. Blocher, "Expert Systems in

Accounting Curriculum," 13:00~14:00

Paul R. Watkins, "Shells," 14:00~15:00

Edward J. Blocher, "On the Expert Systems Section," 15:00~16:00

D.E.O'Leary准教授 (University of Southern California) は、手慣れたものである。OHPを使って専門家システムの構造、知識ベースとしてのデータベース、知識の表現、経営管理との関係、今後の発展について述べた。しかし、肝心の教育問題は触れずじまいであり、自分自身がどのように本務校で専門家システムを学生に教育しているのかは遂に聞けなかった。私が今回のAAA大会に参加したのは、中部大学における演習の指導の中でこれから専門家システムをどのように指導していったら良いかの指針を得るためにアメリカの現状を知る必要があったからである。後の3人の報告者に期待することとする。O'Leary准教授の報告中、推論過程についての説明があったが、私の周囲の人々はこのかなりの初歩的な知識について熱心にメモをとっていた。内容的には、板書による帰納法と演繹法の説明であり、別に論理数学を用いての説明でもないのだが、不思議に思う。例として出された問題も「私が結婚するとして、どのような女性を花嫁として選ぶか。」ということである。皆、笑う。これは序盤だからと私もハッハッと笑う。

C. E. Brown 助教授 (Oregon State University) は、Exxon、TRW、Northwest Airlines、A. D. Little、DEC、TI、Touche RossおよびC & Lybrandでの専門家システムの調査事例を紹介した。このCPE全体を通じて唯一の資料がこのBrown助教授の論文リストである。3穴のA4用紙には、単著論文3編、共著論文11編の計14編が記載されている。私には初めての雑誌もあるので、掲載誌を次に示す (掲載順)。

a. Intelligent Systems in Accounting, Finance & Management, International Journal of.

b. Internal Auditor, The

c. Expert Systems with Applications: An

International Journal.

- d. Benefits Quarterly.
- e. Management Accounting.
- f. Information Systems, The Journal of.
- g. Financial Planning, The Journal of.
- h. Insurance Regulation, The Journal of.
- i. Expert Systems Review for Business and Accounting.

この他に、P. Watkins and L. Elliot, ed., Expert Systems in Business & Finance, Chichester, England: Wiley, 1991 (近刊) および Selected Readings for CPAs in Industry, Volume 2: Technical, AICPA, 1990がある。

E. J. Blocher 教授 (University of North Carolina) はこのCPE部会の中心人物である。ここでこそ、テーマ通りの教育問題が話されると期待したのだが、これまでの雑誌論文の解説をただけであり、教育問題は出なかった。「3時からここで専門家システム部会をしますから、皆さん居て下さい。」と言っていたから、そこで言及されたのかもしれない。この部会 (Artificial Intelligence/Expert Systems Section) は、本年から発足したばかりの新しい部会のものであり、E. J. Blocher教授が部会長を勤めるようである。

P. R. Watkins准教授はO'Leary准教授の報告を更に詳細にしており、シェルの利用を中心としていた。途中で、PC AI 3rd Annual Product Guide (コピーの製本とじ) が回覧された。この中に掲載されているのは、専門家システム、シェル、言語ソフトである。よく多量のものを収録してある。このWatkins准教授とは、今までの3人と違って、よく目が合う。マイルドな感じの視線である。ここで質問をしておかないとせっかくCPEに出る意味がないので、質問をする。「あなたは教室でどのように人工知能や専門家システムを教えているのか。もし、教えていれば、専門家システムの構築の最大の問題点は推論なのだから、どのように教育しているのか、何かの数学との関連付けの上で推論過程を教えているのか。」これに対するWatkins准

教授の答えは親切なもので、私の指摘は自分の大学でも重要な課題であること、人工知能言語と推論過程との関連付けが次の課題であることとの答えを得た。休憩中に廊下をブラブラしていると、高松正昭教授 (立正大学) に会う。私のCPEの室の隣のにぎやかな室にいるようだ。大会受け付けが始まっているので、受け付けを済ませて名札 (第2図) を胸につけてホテル内をブラブラする。白木助教授は部会で知り合った先生とナッシュビル市街へ行ったらしい。5時頃高松教授を見つけ、ホテル内で夕食。



第2図 AAA登録済証兼名札
(ミスプリでチューバ大学になっている)

白木助教授が帰るまで参加者名簿を見る。参加者会員2,345名、他に家族が加わっているから大変な盛況である。日本名を持ち、日本国内に本務校を有する参加者は次の16名である (大会参加者名簿掲出順)。

- 青木 茂男 (東京国際大学)
- 檜田 信男 (中央大学)
- 平松 一夫 (関西学院大学)
- 飯野 利夫 (駿河台大学)
- 稲垣富士夫 (青山学院大学)
- 榊原 英夫 (富山大学短期大学部)
- 白木 俊彦 (中部大学)
- 高松 正昭 (立正大学)
- 竹森 一正 (中部大学)

富塚 嘉一 (中央大学)
山口 達良 (日本大学)
矢沢 秀雄 (専修大学)
上領 英之 (広島修道大学)
畑山 紀 (札幌学院大学)
中島 省吾 (フェリス女学院)
田中 隆雄 (東京経済大学)

8月12日、昨日と同様にマクドナルドで朝食、そのままオプリランド・ホテルへ徒歩で。8:30からの開会式および記念講演に間に合う。舞台には、75という大きな字が2つ正面左右にはってある。大会委員長A. A. Arens教授 (Michigan State University) が開会宣言、R. Dornbusch教授 (MIT) が記念講演。この大会は75周年というおめでたい記念大会であるから、おめでたい演説を行っても当然なのだが、Dornbusch教授の記念講演は少々問題である。アメリカの失業率が下がったとか、経済成長率が上昇しているとか、聞いていると本当に気持ちの良い内容である。しかし、その統計はどこから取ってきたんですかと聞きたくなるような楽観的なものばかりであり、日本に対してはもっと技術移転が必要だとか、何かはぐらかされたような妙な内容である。講演が終わった時は拍手喝采だったからアメリカ人には良い内容だったのだろう。

そんなにアメリカ経済が良くなっているとは、私にはとても思えない。第一、日本がこれ以上アメリカ国債を買わなくなったらどうするのだろう。アメリカ経済は、既に国債の利子を払うのも大変になってきているのに、と思う。関東大震災が起きて、東京復興のために国内の資金需要が逼迫してアメリカ国債まで手が回らなくなった時、アメリカ経済は恐慌を乗り越えて破産になるのではないのか。あのような講演をせねばならない程、アメリカ経済は悪くなっていて、皆で悪い事実から目をそらしている感がある。

白木助教授は、中島教授と国際会計部会実務会議へ、私は飯野教授を囲むグループに入れて

もらい、テラスでコーヒー。飯野教授の学長職の御苦労話を聞く。正午近くまでテラスでゆっくりした後、国際会計部会昼食会会場へ。正面左手のテーブルに中島、飯野、檜田、矢沢、稲垣、白木、平松、アフリカ人の先生、P. Jadersten (Stockholm School of Economics)、高松、青木、富塚、畑山の各先生。私の隣のJaderstenさんは、世界中を研究で飛び廻っているらしい。奥さんは日本人とのこと、実家は横浜でオオサワというそうである。家にはfaxを置いて実家と通信しているとのこと。演壇には、Mueller教授 (University of Washington) の晴れがましい姿がある。会場は大盛況である。

白木助教授は、午後の自由論題の部会も積極的に参加とのこと、私は、出版社のブースを見学しながら、パンフレットや景品をもらって回る。AAAのブースを見つけ、田中章義編『日本における会計学研究の発展』(同文館)に出ていた井尻雄士教授の『APLによる会計構造』

(Accounting Structured in APL) を\$8で求める。ブース回りの途中で平松教授に会う。現在6ヶ月の在外研修中とのことで、ロンドンから資料集めをしながら来ているとのこと。彼我の研究環境の違いに溜め息が出る。こちらはやっとの思いで自費で来ているのである。IMA (旧NAA) のブースでは、IMAの人が話し込んでいて私の番が来ない。やむをえずホテルへ。

一休みの後、ラマダ・ホテルのAAA用のシャトル・バスでオプリランド・ホテルへ。ところが様子がおかしい。フロント前のロビーは香水の香りが一杯で、男女共に盛装が目立つ。特に女性の盛装が目立つ。慌ててラマダ・ホテルへ戻る。白木助教授はリラックス・スタイルで出るようなので、注意、急いでスーツに着替え、ネクタイを付ける。シャトル・バスで再度オプリランド・ホテルへ。会場入口で檜田教授とあったのでそのまま御一緒する。18:30からの懇親会は、「歴代会長を称える第75回開会懇親会」(Seventy-fifth Anniversary Opening Reception in Honor of Past Presidents) である。

8月13日、ラマダ・ホテル裏のショニーズ・インのレストランで朝食。\$3.89なのにハムとウィンナー入りのサラダバーのセルフサービスに、パンとコーヒーである。私も白木助教授もメロンを特におかわりする。記念講演は8:30からの部は省略、10:15からの部に出ることにして、土産物屋を物色する。安くていい寄せ木細工があるが、持って帰っても置く場所がない、誠に残念。結局ブリンチン3ヶを購入、\$3.50。

10:00のAAA行きシャトルで会場へ。正面に向かって左手手前に既にかかなりの人が座っている。中島・飯野両教授を中心とした日本人グループを見つけて着席。3人の講演者が講演したが聞き取れない。断片的に単語を聞くのみ、飯野教授は、数字が出る度に掌にもう一方の指で数字を書き、うなずいている。数字だけを正確に聞き取ろうとの方法である。参考になる。直ちに昼食会、高松教授と舞台向かって右の3列目に座る（1列と2列は予約席になっている）。と、すぐにイラン人とエジプト人が座り始め、期せずしてアジアコーナーになってしまった。私の隣のイラン人は、カナダで勤務とのこと、大学で英語、友人とはペルシャ語とアラビア語、と日本人にはない言葉の苦勞をしているらしい。何人かのイラン人はテーブルに並べられた皿をひきあげさせている。タブーの肉が入っているのであろう。ペルシャ語とアラビア語がそのうち飛びかい始め、何やら論争が始まったらしい。まず皿を下げさせた先生が、そしてその友人が次々に席を立ち、このアジア・テーブルは私と高松教授だけになってしまった。私の位置から一直線に30m程の席に矢沢教授が見える。その席が日本コーナーだったので、中島・飯野両教授を中心として集まっていたそうである。また、Mueller教授がわざわざその席に着いて食事をしたとのこと、後で白木助教授より聞かされ、気の遣いように感嘆する。私は、昼食会の始まる前に、ゆっくりと自分の席を探して歩く井尻教授を発見、昨日AAAのブースで求めた『APLによる会計構造』にサインを戴いた。これで今回のAAA行の目的は全

部達成である。井尻教授は胸に一般会員とは違うバッジを二つ付けていたが、学会の栄誉勲章的なものであろうか。

昼食会の後は、高松教授と観光に出掛ける。といっても、ラマダ・ホテル近くの博物館の看板をかけてある土産物屋である。模型、カントリー・ウェスタンのスターの蠟人形、スターの愛用車の3つの博物館がある。模型以外の2つに入ることにする。各一人\$3、カントリー・ウェスタンの方はさっぱり分からない。白人達はにこにこ話しているから面白い所なのだろう。私達に分かるのはプレスリー位のものである。スターの愛用車の方は、スターは分からなくとも自動車は分かる。これはものすごいコレクションと思う。プレスリーのキャデラックも、T型フォードも、50台ほどがずらりと並んでいる。この方は確かに\$3なら安い入場料である。この後、オプリランド・ホテルまで戻り、高松教授と20:30の懇親会の開会を待つ。経営学部長在任当時の情報化の推進と問題点、これからの経営学教育における情報化の展望と、有益な話を伺えた。また、会計情報システム論の講義の進め方について意見交換をした。個人的なパソコンの利用についても拝聴できた。私が心配しているとおり、男の子はパソコンのゲームにのめりこみ、勉強には有害とのことであった。

20:00を少し過ぎた所で会場へ行こうと移動、既に入口は満員で開場を待っている。入り方は簡単である。入口で皿にバイキング形式で好きなものを取り、好きなテーブルでショーを見ながら飲みかつ食いという方法である。飲む方は、開場のあちこちにセルフサービスのコーナーが設けられており、好きなものを好きなだけ飲むのである。カントリー・ウェスタンがいきなり始まる。あいさつは一切なしである。当初のバンドの予定が変わったので格下げのバンドが来たらしい。年が若く、冗談を言っては自分達できゃーきゃーと喜んでいる。しかし、周囲の白人達はよく笑っているから面白いのだろう。何人かの子供と大人が舞台の前で踊り始める。適当に食べた所で退出。

ナッシュビルでの最後の夜である。室には戻らず、広々としたロビーでくつろぐ。南部地方の居間を基本に設計しているらしく、実に気持ちが良い。ソファでゆったりつくろぐ。時間という感覚がなくなり豊かな気持ちで一杯になる。一瞬、狭いわが家を思い出す。そのうち、白木助教授が帰って来る。AAA会場での友人の作り方についてのアドバイスをし、これまでのお金の精算をする。白木助教授はもう一泊の上、NorfolkからPortlandへ行き、San Jose空港経由で8月23日帰国とのこと、互いの無事の帰国を誓い合う。

白木助教授は、初めての海外旅行で、初めてのAAA参加で、初めてのCPE出席で、しかも大いに人的・資料的に成果があり、大学の先輩にも予定通り会え、実に良い旅行であったとのことである。同慶の至りである。

8月14日は、ラマダ・ホテルの裏にあるレストランで朝食、\$1.89のカンパンに引かれたのだが、安いだけある、フルーツが少ない。白木助教授はそのまま会場へ、私はしばらく室で。今日は10:00のAAA会場行きのシャトルが来ない。やむを得ず、荷物を引いて会場へ。Gary Sundem教授 (University of Washington) 座長の「会計教育変化委員会」関係の部会に出ようと考えたが、大きい荷物がはばかられ、ブースを一周してすぐに空港へ発つことにする。ホテルのバスなのに\$7とる。ラマダ・ホテルのシャトルなら\$1で済むから戻ろうと思ったが乗車する。

ナッシュビル国際空港の売店で、3,500 Good Jokes for Speakers と How to Speak like a Pro の2冊を購入、このような本は日本では見つけようがないので、アメリカ国内で見つけるつもりであった。ペーパーバックで計\$11.90、安いものである。いくらアメリカ人がジョークが上手でも、このような本の助けなしに、鮮やかなジョークを飛ばせるはずはないと思っていたが、予想は当たっていた。3,500…の方は残部1冊であった。

4. 議会図書館 (Library of Congress …… 8月15日～17日)

ワシントン・ナショナル空港行きAA1574便では偶然に窓際に席を取れた。上昇中に黒い煙様のスモッグが高度2,000 m位までぎっしりとつまっているのが見えた。5年前にはなかったことだ。実はオプリランド・ホテルの写真を撮る時に、1/500、f5.6という露出計の指示値が出て、日本よりも1目盛り小さく、不思議に思っていたのであった。この農業地帯の太陽光線の量が日本の約半分ということである。この濃いスモッグが上空を覆っているのであれば当然である。これが延々と東海岸まで続くのである。すっかり考えこんでしまった。アメリカの大気汚染は大変な所まで進んでいる。

ワシントン・DC到着後、タクシーに乗る。車両番号1565号、運転手は中東方面の出身者である。目的地のFalls Churchまでは\$35とか、チップは20%とか、妙なことを言う。しかも、走る方向が違う。西へ向かうのが北へ向かってポトマック河沿いに走っている。「至ダレス空港」などという道も走る。途中で「右Tysons」という表示の所で私はほっとして進路変更を指示した。運転手は「シット!シット!」とハンドルをたたき、車が左右に揺れる。私はジッと構えるだけである。結局、高速を下りた所で事故渋滞があり、料金\$35となった。運転手はこれの20%のチップをくれという。私は渋り、計\$40に値切ったが、大男が頭の上から「Thirty-five dollar and twenty percent, sir.」などといわれると生きた心地がしない。ラマダ・ホテル・タイソنز・コーナーにチェックインの後、ぐったりして2時間程動けなかった。またも、雲助におつかってしまった。公定料金\$20の距離を\$35で走り、\$5のチップをせしめて彼は今、「神様が私に日本人の客を導いてくれ、\$15分の余分の仕事と\$5のチップをくれた、神様に感謝!感謝!」とにっこりしているのだろう。しかし、まずは無事に到着を祝わねばならない。

8月15日、8:30起床、昨日の機内食の残り

と紅茶で朝食、9:30にホテルを出る。ベルボーイにDCまでの行き方を尋ねると、メトロで行けという。シャトルで送ってもらう。彼はパキスタンからの移民であるそうだ、日本をべたほめする。トヨタ、ニッサン、ホンダ、メルセデス、パナソニック、日本製品は素晴らしい、日本は金持ちだ、と。約5分でメトロの「西滝教会駅」(West Falls Church Station)に着く。この鉄道は「ワシントン首都圏交通公団」の地下鉄線で、議会図書館すぐそばにも駅(Capitol South)があり、\$1.5である。切符と乗車の方法は、サンフランシスコのBARTとまったく同じであり、\$20まで金額を記憶できる金券式の紙カードで自動改札を通り乗車、下車もBARTと同じで、残高があれば切符は戻ってきて、また使える(第3図)。車両もBARTと同じである。



第3図 ワシントンDC地下鉄切符
(\$5の残金がある)

Capitol South駅のエスカレーター(一個所)を昇ってすぐ斜め右が議会図書館新館である。議会図書館は議事堂正面(東側)の本館(Jefferson Bldg)、その更に東側の別館(Adams Bldg)、地下鉄駅そばの新館(Madison Bldg)の3館からなる。3館は地下通路でむすばれており、炎天下や夜間の移動に便利である。

新館の入口では、セキュリティ・チェックがあり、持物検査をされる。ただし、空港のような厳しさはない。このチェックは退館の時も必要で、私はそうとは知らず警備員にいらまされてしまった。どの入口も2名の警備員がいて、表

情こそニコニコとのんびりしているが、全員が拳銃付きであり、アメリカの厳しさを感じる。なお、入館は子供も可能であり、新館6階の食堂では家族連れの観光客が昼食をとっており、家族での待ち合わせの際にも、安全で確実に安く展望も良いから都合がよからう。

新館は、わが国国会図書館の参考室の機能を新館全館で実行しているという感じである。チェック後直進すると、すぐにエレベータがある。入った場所はG levelであるから、2階の201号室へ行く。ここでは、総合案内をしてくれるし、自由に機械検索もできる。機械検索は2台の端末が用意されており、InfoTracというシステムで全議会図書館の蔵書を検索できる。また、その調査結果をプリンターでプリントもできる。最近の法律関係はこの室で良いのだが、各省庁資料は第133号室で調査する。あればそこで閲覧できる。201号室で司書の指示に従って、1980 CIS Annual Index, Congressional Information Service, Washington, D. C., 1981. という政府公開資料総合目録を調べている時である。司書カウンターで盛んに「ジャップ…、ジャップ…」という若い男の声が聞こえる。そのうち、まったくの沈黙が数秒間あり、「やっばい」という感じでソローッと席へ戻る靴音が聞こえた。あまり言葉がひどいので、誰かが「日本人がいるぞ」と注意したようである。その彼は、私が再度司書に相談している時、隣の司書にいきなり、「僕のテーマは『日本の法律とその形成』です」と言って、立ち去っていった。とにかく、ここはアメリカの中心地であり、私は日本人なのである。言動は極めて紳士的にせねばならない、と思う。

政府省庁の公開資料は1階の第133号室である。この室は検索調査には便利であり、端末が約20台あり、自由に検索したり内容をダウンロードできる(IBM-DOS)。私が入室した時も2人がダウンロード中であった。ここもシステムはInfoTracであるが、ここのプリンターはラインプリンターであり、印刷がきれいである。C076番機に陣取り、検索を行う。検索は英語

で行う関係で簡単である。検索する資料を書籍とか雑誌とか選んだ後、検索の用語を入力すると該当項目数が表示され、必要ならプリントできる。検索した主要用語は次のとおりであった。

life cycle cost

research and development cost

capital cost

national science foundation

capital budgeting

cost handbook

budgeting handbook

expectancy theory

もう、これでたっぷりと日本で居る時の半年分位の調査をした。しかし、Fabrycky and Blanchard著の最新刊で「Life-Cycle Costingに関して最高の文献」と称賛されている国防総省の資料「Design to Cost」は出てこない。UCBでも未調査であり、図書番号が分からないので、司書に相談する。司書は端末をたたき探すが発見できないらしい。私の手帳に控えたDODの資料公開番号を指して「この資料はコンピュータでは探せないの、U.S.-Monthly Catalog of Government Publications-Cumulative Index 1~3/4, 1988を検索するように。それでも出てこなければ、別棟のGeneral Accounting Office Libraryへ行って下さい。」と教えてくれた。それから、1988年から著者でDepartment of Defenseを、項目でDesign to Costを探しながら、1年1年遡り、1966年まで辿った。目標とする資料は発見できなかったが、別の資料は9点発見できた。その点では徒労ではなからう。18:14となり、腹が減ってくる。外はまだ明るいので、隣のFederal Center駅まで約1kmを歩いて行くことにする。しかし、昼なら賑わっている官庁街もがらんとして人気がない。気持ちが悪くなり早足で地下鉄駅へ入る。

新館 (Madison Bldg) の食堂は6階であり、閲覧者の利用時間は次のとおりである。

午前 9:00~10:30

午後 12:30~15:00

これ以外の時間帯での食事は G levelの本館

行きのトンネルの途中にあるコーヒーショップ (営業 9:00~17:00) か、コーヒーショップから更に本館寄りの自動販売機コーナーになる。政府刊行物販売所は今回行けるか分からないが、次回のために、住所をメモる。

Bookstore, U. S. Government Printing Office

710 North Capitol Street NW

Washington, D. C., 20401.

phone (202) 275-2091

ホテルでは、研究の進展と議会図書館の初乗りを祝してビールで一人乾杯した。シルベスター・スタローンに似たウェーターがどんどんビールを持ってきてしまうが、まずはおめでたいのである。

8月16日、9:00にメトロ行きのシャトルが出るというので急ぐ。今日は、昨日の司書の指示通りに、別館Adams Bldgへ向かう。しかし、建物が大きく、永田町を歩くのと勝手が違う。玄関で拳銃を下げた、でっぴりとした黒人の警備員から、セキュリティ・チェックを受け、図書請求台 (Request Desk) へ。図書請求票 (Request Card) の書き方を教えてもらい、閲覧室 (Reading Room) で自分の机を確保して、その番号 (Desk Number) を確認してから請求である。あるなしにかかわらず、図書館員が机に来てくれる仕組みである。しかし、受付台の館員は20分待てといい、閲覧室の館員は最低40分という。ついに1時間30分待ってしまった。次回からの参考に、図書請求票 (第4図) の書き方を整理する。

① 3枚複写式である。図書番号 (CALL NUMBER)、著者・書名をしっかりと書く。

② 閲覧室で待つ時はDESK NUMBERを書く。

③ 他を廻って後で来る場合は②は空欄にし、Holdに×印をして姓を書く。

④ 氏名および住所を書く (パスポートのとおりにする)。

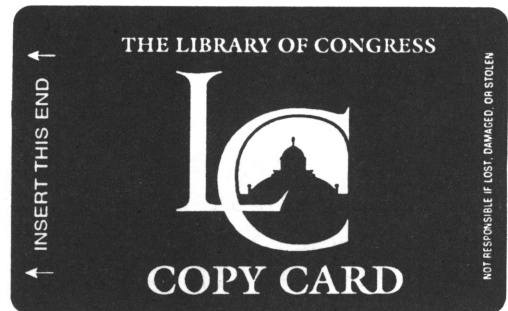
⑤ 受付の日時を打刻してもらい、赤い伝票をもらう (持って帰れる)。

コピーの方法はUCBとほぼ同じである。議会

図書館は最初の \$ 1 で 80 分の金額が記憶されたコピーカード (第 5 図) を入手して一枚当たり 10 でコピーする。次回からはコピーカードに最高 22 の金額を記憶させて繰り返しの利用ができる。わが国国会図書館のコピーの方法と較べると非常にユーザー指向で良い。わが国では国民がいくら注文しても受け入れようとはしないだろうから、次回の日米構造協議でぜひとも取り上げて欲しいものである。

別館で入手したのは、UCB で検索していた『主要兵器体系調達時におけるライフ・サイクル・コストの見積計算の実情と将来の利用に関する国防総省報告書』である。手にして見れば何と、B-163058 という文書番号を付けたページのファイル・カバーに収まった 4 枚のタイプ文だけである。貴重な文献に到達、第 1 号である。昼時になったので館外へ出る。商店街で \$ 1.00 のホットドッグと野菜ジュースを買い、\$ 1.82、82 と \$ 5 を出して \$ 4 のおつりをもらう。さあこれでコピーには困らない。Madison 館の縁石に座って食べる。

Jefferson 館の正面入口 (議事堂真向かい) は改修工事中なので裏側 (東側) の通用口のような入口から入る。本館だけあって「専門研究者と研究用務を有する個人のみ入館可」と厳しい入館制限のパネルがある。入口はセキュリティ・チェック、ここは G level なのでエレベーターで 1 階へ昇る。入口の両側が案内のカウンターである。閲覧室は大きな円形で円の中心に図書請求の受付台がある。机番号 221 を確認し



第 5 図 議会図書館コピーカード

(水色のプラスチック製)

① →	PRESS FIRMLY CALL NUMBER TS 168.D45 1967	PRESS FIRMLY AUTHOR Department of Defense	PRESS FIRMLY BOOK/PERIODICAL TITLE Department of Defense In-House Value Engineering Conference	PERIODICAL VOLUME OR DATE
	MAIN READING ROOM DESK NUMBER 221	Correct Legible Name and Address Required NAME Kazumasa Takemori ADDRESS 3-8-103 Minami CITY Yokohama, 232 JAPAN		
② →	If you have not indicated a desk number, do you wish this book for Hold ☐ Overnight Call ☐	STAFF USE ONLY		STAFF USE ONLY
③ →		Message		Not on Shelf Clarify Call No. Give Volume No. Give Complete Date Verify Call No. Other Location (See Message) Missing in Inventory
	Last Name	Dk. Att-#	CC#	Date
		④ ↑	⑤ ↑	

第 4 図 議会図書館図書請求票

(本館のもの、他館も同形式、マル番号は本文に対応)

て請求、今度は別館のことがあるので、学習効果よろしく30分おきにカウンターへ行き確認、2時間目にHOLDの状態で棚に置かれていたのを発見した。ライフ・サイクル・コストの古典的資料の発見第2号である。しかし、これも『国防総省価値工学省内会議議事録—1967年9月12—14日』とされているだけの簡単なレジメ集である。個人名の引用で見たことがあるR. G. Rueggは当時の空軍の中将であり、この文書の中では、6ページにわたってライフ・サイクル・コストについての見解を述べている。なるほど、これならLCCの始祖の地位を与えられても当然と思う。

この本館の閲覧室は円形ドームの天井の真下であり、ヨーロッパの中世のお寺にいるような荘厳さである。周囲に座っているのは、主、妖怪、学者の中の学者といった感じの人々ばかりである。このLabor Dayの季節に図書館に籠もるのは、正常な家庭人のやることではないだろう。コピーコーナーでコピー。別の資料を司書に相談、カード・カタログ室へ案内される。まず、A～Pの区画でLife-Cycle Costを調べること、それでなければQ～Zの区画でU. S. Department of Defenceを調べるよう助言、“I hope you will find it.” と言ってくれる。しかし、見つからない。FabryckyとBlanchardの両氏はどこであの資料を手に入れたのだろうか、と疑問が沸いてくる。

今日はこれでおしまい、子供達にお土産を買わねばならない。ホテル近くのTyson's Shopping CenterはワシントンDC地区第2のショッピング・センターだそうである。横浜の本牧のマイカルの5倍位の規模である。すっかり道に迷ってしまった。

ホテルに戻って、金土サービスという\$10.89のステーキを食べる。うまくて安い。セルフ・サービスのサラダ・バーからは今日がなごりのメロンをいっぱい取って来る。日本に帰ったら、この程度のステーキは食べられても、このようなメロンは絶対食べられないからである。

8月17日、最後の調査日である。この滞米期間2週間の短さと移動に要した時間の大きさを悔やむ。ホテルのシャトルとメトロで新館へ。受付でGeneral Accounting Office (GAO) Libraryへの行き方を尋ね、歩き始める。しかし、地図が違うらしい、全然たどりつかない。National Museum of Artの警備員に尋ね直し、トボトボと歩く。しかし、やっと着いたGeneral Accounting Officeは土曜閉庁のため図書館も閉館、写真だけ撮って帰る。

このGAOのビルの西側の交差点角のBurger Kingは8:00～20:00の営業時間で、しかも目の前の市役所 (Metro Bldg、警察本部も兼ねるようだ) の中の警察官の食事所兼溜まり場になっている。ワシントンDCの中で一番安全な場所であろう。次回のGAOビル訪問に備えて、最寄りの地下鉄駅Gallery Pl-Chinatownからの道順を次に記す (第6図)

①「西滝教会駅」から10番目のMetro Center駅でRed Line線へ乗り換え、WheatonまたはGlenmont行きで次のGallery Place Chinatown駅 (駅表示はGallery Pl-Chinatown) で下車。3両目の位置から進行右方向へ20m進む。

②左手にエレベーターの乗り口あり。エレベーターのドアの左手に切符カード挿入式の自動改札機がある。ゆっくりとカードを入れ、ゆっくりと取り出してから、エレベーターのボタンを押す。早くすると、不正乗車と勘繰られ、拳銃付きの駅内警察官が誰何する。疑われたら何と言っても無駄、絶対見逃してくれない。

③エレベーターを出ると、いきなり外の歩道である。その左手にはメトロ・バスの停留所である。だからこそ、このエレベーターの監視は厳しいのである。道路を隔てて向かいがNational Museum of American Art、歴代大統領の肖像画が目玉である。日本語解説書を用意してあるが、あまり利用者がいないらしい。ぜひ、寄ってあげるべきであろう。

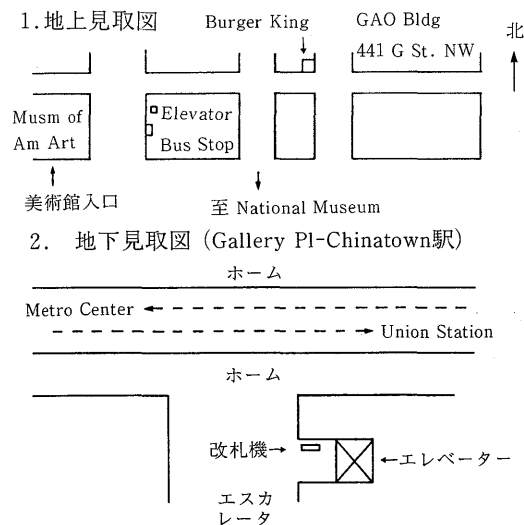
④正面のMuseumを左に見て、すぐ前の交差点を右へ坂を下る。

⑤坂を下って2つ目の角の北がBurger King、

南がMetro Bldg. GAOが朝一番の調査ならホテルで食事せず、ここで食事すること。

⑥Burger Kingの東（地下鉄駅の反対方向）がGAOビル。入館にはセキュリティ・チェックを要する。

この後はUnion Stationへ行ってアムトラックのボストン・ニューヨーク行の時刻表をもらい、ゆっくりと「西滝教会駅」へ戻り、ワシントン・ダレス空港際のホテルへタクシーを拾う。また、雲助ではかなわないので、威圧的に早口で道順を言う。しかし、運転手、「旦那、ダレスの道はよく知ってますよ、一日2～3回はお客さんを乗せて行ってます。私は空港の近くに住んでいますから。」というのである。なるほど、同じタクシーでも地元のタクシーの安心である。ラマダ・ルネッサンス・ホテル到着、14:50。海水パンツも体操着の用意もないので、この豪華なホテルのプールもジムも利用できない。代わりに、雰囲気を楽しむ。広々としたアメリカのホテル生活も最後である。廊下を散歩したり、ギフト・ショップを覗いたり、レストランでゆっくりとゆったりとビールを飲む。反省会のつもりだったが、まずは満足である。



第6図 General Accounting Officeへの道順

5. 帰国（8月18日、日本時間19日）

5:30に起床、5:45にフロントでチェックアウト、5:57ダレス空港着。

D17ゲート前でAA803便を待つ間、映画「Die Hard II」の場所を見してみる。しかし、管制塔そばの教会はない。おまけに管制塔前は誘導路であり、滑走路ではないことが分かる。なーんだと思う。

AA803便はダラスまで順調に飛んだのだが、ダラスからのAA61便が良くない。油圧系統の故障で6時間の遅れとなった。こういう時は、食べれる時に食べて、飲める時に飲んで、寝れる時に寝るのが生き延びるテクニックである。待ちのため移送されたHyatt Hotelでは出てきたものをどんどん食べて、出された飲み物をどんどん飲む。ワインもビールもどんどん飲んでしまう。前に座っている不安気な日本人ツアーの人々が呆れた顔で私を見ている。しかし、インド人というのはすごいものだ。私の上に行く。まず行列には前に立つし、食事にはこれも前に立っている。食事私よりはるかに多く食べている。

代替機で6時間遅れで飛びたったが、左手に半月を見て12時間半の飛行である。日本時間で昼食が出た後8時間ぐっすり寝る。成田着日本時間20:30、乗務員の盛んな「……apologize you……」のアナウンスがある。ゴルバチョフ解任のニュースで溢れる日本である。平和な、そして狭くて豊かで、家族と職場がある日本である。

8月23日、20:30、白木助教授より無事帰国の電話あり、まずはめでたい。労をねぎらう。

6. まとめ……次回の図書館調査のためのメモ (1)UCBへの行き方

①日本でラマダ・ホテル・FMウォーフを予約(03-3276-8118)。現地直接予約より引き。

②SF国際空港着なら、路線バスでSF市内へ、BARTでEmbarcadero駅へ。④へ。

③SJ空港着なら、タクシーでCalTrain駅へ、

CaltrainでSF終点へ。

④トロリーバスでHyde下車、運転手は教えてくれないから、右手にケーブルカーの終点が見えたら下車。ケーブル終点Hyde駅に立ち、FMウォーフを正面に見て左手がラマダ・ホテル。

⑤UCBに行くために、ケーブルカーでPowell駅(\$2)またはトロリーバスでEmbarcadero駅(¢80)下車。BART駅出札機では\$20分買っておくと問題ない。

⑥BARTでRichmond行き乗車、Berkeley駅下車、学内シャトル・バス乗車(¢25)。

(2) 議会図書館への行き方

①日本でラマダ・ホテル・タイソングコーナー予約、上の①に同じ。

②ダレス空港着、Express Bus "West Falls

Church Metro"乗車(\$5、30分間隔)。④へ。

③ナショナル空港着なら、地下鉄駅で\$20分切符購入、Blue Line線Addison行き乗車、5ツ目のRosslyn駅で乗換え、Orange Line線のVienna行きでWest Falls Church下車、改札手前でバス乗換え券(Bus Transfer)をもらう。④へ。

④ホテルへ電話する。¢25で893-1340、チップに\$1要する。または、

⑤駅前広場から路線バス28A、28BでRamada Lisle Avenue下車、目の前がホテル。

⑥議会図書館へ行くために、ベルボーイに頼んで「西滝教会駅」へ、白人客と一緒に\$0、一人なら\$1。または、

⑦路線バス28A、28Bで「西滝教会駅」へ。

⑧Capitol South駅まで\$1.50、ラッシュ帯(月～金の5:30～9:30、15:00～19:00)は¢70増。